



カンボジア便り ～GMSとGSMとMSG～

在カンボジア日本国大使館 経済・経済協力班 二等書記官

こんどう
近藤
なおみつ
直光



1. はじめに

停滞する日本経済とは対照的に、経済成長を遂げている東南アジアの国々の中でも、とりわけ活気がある国の一つがカンボジアである。筆者は、2010年6月にカンボジアに着任し、早いもので2年が経過した。これまでの当地での生活を踏まえ、カンボジアの現状、筆者の生活などについて一筆申し上げたい。

カンボジアに特段の関心がない人にとっては、「アンコール・ワット」「地雷」「内戦」の三つが当地のイメージであろう。実際、筆者自身の赴任に当たっても、アンコール・ワット観光という安直な動機がなかったわけではない。アンコール・ワット遺跡は、ここで紹介するまでもなく「世界遺産」として世界的に認められた遺跡であり、確かに一見の価値がある。他方、「地雷」と「内戦」は、現在のカンボジアにおいては、過去のものになりつつある。もちろん地雷と不発弾の撤去は、ジャングルなども含めた完全撤去までは、まだまだ数十年単位の時間が必要と言われており、現在でも「カンボジア地雷対策センター（CMAC：Cambodian Mine Action Center）」を中心とした地道な取組が行われている。しかし、日本人にいまだに残るこの二つの負のイメージが、カンボジアへの参入を希望する日系企業に多少の影響を与えてきたことも事実である。

余談ながら日本国内の旅行代理店の店頭パンフレットや



写真2. バイヨン寺院の四面像

書店の旅行ガイドブックのタイトルを見回すと、東南アジアでは「インドネシア」「タイ」「ベトナム」「マレーシア」などと並んで「アンコール・ワット（カンボジア）」とあり、カンボジアだけが遺跡の名前を冠したツアーが組まれていることがあるが、日本に留学経験のあるカンボジア人の知人はこの光景を見て、カンボジアの知名度の低さに心を痛めたそうである。

2. 経済成長とカンボジアの未来を支える子供たち

さて、カンボジアについて、まずは経済指標から概観してみる。

- ・過去10年の平均経済成長率：約7.8%
- ・貿易額（2011年）：輸出47億米ドル、輸入63億米ドル
- ・一人当たりのGDP（2011年）：851米ドル
- ・産業構成：農業（対GDP32%）、縫製業（同9.2%）、建設業（同6.1%）、観光業（同4.6%）

IMFの予測によれば、今後も6%程度の経済成長が見込まれており、国民の多くが一定の恩恵を受けつつ、また、誰もが、今日より明日、今年より来年がより良い生活になると確信して日々を過ごしている。

この経済成長を支える労働力となっているのが若い世代である。2008年の人口センサスによれば、20歳未満人口がカン



写真1. バンテアイ・スレイ



ボジア全人口の46%を占めており、この若者のパワーが、カンボジアの町を歩くと至る所で感じられる「生命力」や「活気」の源泉である。しかしながら、ポル・ポト政権下において、知識人を中心とした大虐殺（一説には300万人）があったという不幸な過去の代償は大きく、社会における指導者となるべき世代の不在は、この国の発展においていまだに大きな影響を与えている。この国の若者のパワーが、将来のカンボジアの発展に正しく向かっていくことを切に願う（筆者のような、国際社会に疎い人間ですら「願う」くらいであるので、この点について一抹以上の不安を感じる日本人が多いのである）。

3. カンボジアの主要産業としての農業

カンボジアは、農地を中心とした平坦な国土を有しており、主要産業は言うまでもなく「農業」である。しかしながら、その生産性は高くなく、農民の暮らしは決して豊かではない。農閑期に、タイやベトナムに出稼ぎに行く、あるいはメコン川やトンレサップ湖で漁をするなど、幾つかの職業を組み合わせた、いわゆる「兼業農家」とならざるを得ない。それには幾つかの理由があると考えられるが、一つには日本の「農協」のような団体が存在せず、農家同士のつながりが弱いことが挙げられる。農協がないことで、技術的な指導を受けられず、いつまでたっても勘と経験が頼りの農業から脱出できない。トラクターやコンバインなどの共同購入・共有もできないため、いまだに水牛とすきで田起こししており、機械化も進んでいない。また、農作物の安定した流通経路も確立されていないため、収穫されたコメの一部は、粳（もみ）のままタイの業者に安く買い取られ、カンボジア産にも関わらず



写真3. 美しい田園風景（コンボン・トム州）

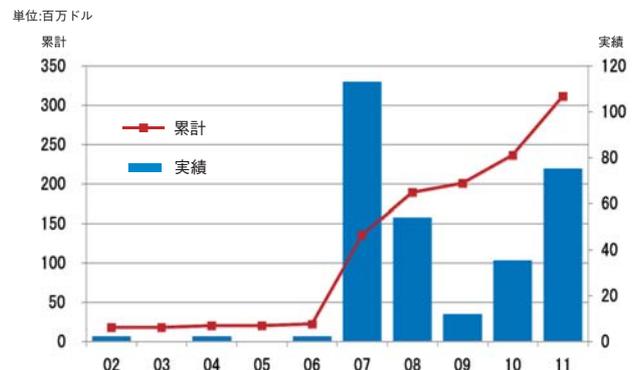
「タイ米」として出荷されている。このような現実であるからして、「農業」は主要産業として位置づけられているものの、それに従事する農民の暮らしは決して楽なものではないのである。

4. 日系企業によるカンボジアへの投資

カンボジアは、アセアン10か国のほぼ中央に位置し、大メコン圏（GMS：The Greater Mekong Subregion）として、各種産業が集中するタイと著しい成長を遂げているベトナムに囲まれている。

2010年頃から、カンボジアに関心を持つ日系企業が増加しており、カンボジア開発評議会（CDC：The Council for the Development of Cambodia）から「適格投資プロジェクト（QIP：Qualified Investment Project）」の認定を受けた日本からの投資額を図1に示す。これらのカンボジアに進出を決めた企業は、中国に代わる新たな国への投資を模索した結果、上述の大メコン圏としての「地の利」を活かした展開を見込んでいる。今後も日本から当地への投資は増加が見込まれており、製造業を中心とした多様な産業への投資が期待されている。

現時点で、当地に進出している外国企業は、圧倒的に中国企業が多いが、日系企業の就職説明会やジョブ・フェアが開催されると必ず大盛況となり、参加者からは「中国の企業より、日系企業で働きたい」という声が聞かれるようである。日系企業の人気の高まりと日本からの投資の増加により、カンボジアにおける日系企業のプレゼンスは年々高まっていると言える。隣国タイは、日系企業なくしては経済が成り立たないと聞く。カンボジアがそのような状況になるかは予測できないが、いずれにしても日系企業への期待は大きい。



出典:カンボジア投資委員会 (CDC/CIB) 及びカンボジア経済特別区委員会 (CSEZB)

図1. 対カンボジア日系企業投資認可実績（2002～2011年）

5. 対カンボジアODA

筆者は、大使館の経済・経済協力班にて、教育、上水道、通信・放送などを担当している。日本の対カンボジアODAは、1991年のパリ和平合意の翌年の1992年からスタートし、現在までトップドナーである。現在の支援は、インフラ整備、農業支援、教育、保健、ガバナンス分野を中心に実施している。カンボジアへの主要ドナーの実績を図2に示す。

筆者が担当するODA案件のうち、良好な効果が発現している案件として、「プノンペン水道公社（PPWSA：Phnom Penh Water Supply Authority）」への支援が挙げられる。浄水プラントの修繕・拡張、運用技術などを、日本が支援した結果、ほぼ日本と同じ品質の飲料水が提供されるに至った。浄水場から各戸までの配管も日本並みの品質で管理されており、配管から漏れる水を示す指標である「漏水率」は、プノンペン都内に限れば6%未満と世界の先進国並みの水準である。

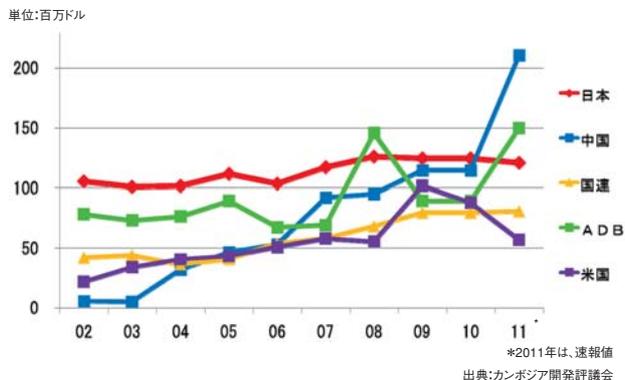


図2. 対カンボジアODA 主要ドナー比較 (2002～2011年)



写真4. 草の根支援プロジェクト 小学校開校を祝う子供たち

6. 通信を取り巻く状況

カンボジアを訪れる日本人の多くは、街を歩くカンボジア人の携帯電話利用に驚く。その理由は携帯電話の利用者の多さと、その利用形態である。カンボジアは、携帯電話の契約数が、固定電話の契約数を上回った世界で最初の国であり、2011年末までに携帯電話の契約数（SIMカードの発行数）は、1400万を超え、カンボジアの人口を超えている。とは言え、事業者の乗換えで廃棄されるSIMカードや、一人で複数契約している者も多いため、普及率は50%程度と言われている。

カンボジアでは雑誌等の娯楽メディアが少なく、レジャー施設も少ないため、カンボジア人は携帯電話での会話が日常の楽しみの一つであり、とにかくよくしゃべる。バイクタクシー（バイクに二人乗りし目的地まで送ってもらう）に乗車中でも携帯電話を掛けるし、受ける。ひどい場合になると、運転手も電話中だったりする。またまた余談ながら、カンボジア人はバイクの上でいろいろなことをする。停車中のバイクのシート上で昼寝する姿は町中いくらかでも見られるし、バイクに一家4人が同乗して移動するのも日常茶飯事、バイクに乗りながら点滴をしている病院帰りの患者までいる。

経済発展の途中にあるカンボジアにおいて、これほど携帯電話が普及している理由の一つは、低廉な料金である。現在、外国資本の事業者を中心に、9社の携帯電話事業者が参入し、お互いにシェアを奪い合っている（現在、もう1社が参入準備中である）。ある意味正しい競争原理が働いているため、料金はかなり安く設定されており、同一事業者内の通話は、1分当たり0.05ドルから0.1ドル（4円から8円）程度である。携帯電話システムとしては、カンボジアといえども第2世代から第3世代に移行しつつある。第3世代～第3.5世代はUMTS（Universal Mobile Telecommunications System）、第2世代はGSM（Global System for Mobile Communications）と1社のみCDMA（Code Division Multiple Access）である。

データ通信料金も安く、データ量の上限が2Gbytesのプランが1か月5ドルで利用できる。このため、iPhoneなどもたった5ドルで、1か月間WEBとMailが使える、今話題の「テザリング」も可能という便利さであり、筆者も2社と契約をしている。データ通信もエリアによっては第3.5世代で接続でき、条件次第では1Mbps程度で通信が可能である。

最近になり、第4世代（LTE：Long Term Evolution）サービス開始を称する事業者が現れたが、現時点で音声サービスは提供されず、PC接続を中心としたデータ通信サービスを提



供している。また、カンボジアでは、意外なことにWiMAX (Worldwide Interoperability for Microwave Access) も事業免許が交付されている。しかし、免許交付後、他のサービスとの周波数の重複が判明しサービスが開始できずにいる。上記で携帯電話事業者の料金について、「ある意味正しい競争原理」としたのは、「正しい政策」の結果生まれた競争原理なのか、はたまた「たまたま」なのか筆者には判断できないからそう書いたのだが、WiMAXの現状を見る限り…、ということである。

ISPによるインターネット接続サービスについては、国民の所得がそれほど高くないため、PCの所有率はまだ低く、ADSLなどの接続サービスは外国人向けの高額なものが中心である。しかし、市内のレストランやカフェなどの多くが、来店者用にWiFiアクセスを無料で提供しているため、若者はWiFiによる接続やネットカフェ的な店でインターネットに接続している。上述のとおり、携帯電話の普及率が高いためスマートフォン利用者も多く、スマートフォンでインターネット接続する者も多い。

7. カンボジアのグルメ事情

さて、カンボジアの首都プノンベンを訪れる日本人から聞かれる当地の感想の一つに、「食べ物がおいしい」というものがある。旧仏領であったこともあり、フランス料理レストランは数件あるし、イタリア料理、ドイツ・スイス料理、地中海料理、中東料理、韓国料理、中華料理、タイ料理、ミャンマー料理、ベトナム料理などなど、プノンベンに限れば、バリエーションも意外に多く、確かに味も良い。酒税が安く（ビールは25%）、生ビールがジョッキ1杯1ドル～2ドル（80円～160円）程度と格安であることもあり、アルコール込みでも、各国料理が日本の相場の半額から1/3程度の金額で楽しめる。

ちなみに、ケンタッキーフライドチキンは進出しているが、ハンバーガーのマクドナルドは進出していない。

もちろん、カンボジア料理店も街の至る所にあり、味も良いのであるが、日本人が「カンボジア料理はおいしい」と連発するのは、実は訳がある。カンボジア料理は、比較的あっさりした料理が多く、「激辛」でもなければ、「砂糖甘い」わけでもなく、口当たりが良い。しかしこの口当たりの良さは、実は化学調味料、グルタミン酸ナトリウム (MSG: Mono-Sodium Glutamate) の味だからである。カンボジア料理では、MSGを何にでも使う。炒め物、揚げ物、スープなどは当たり前で、サラダにも入っている。しかしこのMSG、北米においては憎むべき存在らしく、筆者はカンボジアのレストラン

ンで出会った自称カナダ人旅行者に「日本は、カンボジアでMSGを販売するな！」としつこく抗議され、へきえきした記憶がある。数日滞在しただけの旅行者がそう感じるほど、この国のカンボジア料理は、どこで食べてもMSGの味なのである。なお、釈明するわけではないが、日本がMSGの使用を強要しているわけでもなく、もともとカンボジア人の嗜好に合っていたのだろうか、カンボジア人が自ら好んで使用しているのである。もっとも、カンボジアにMSGをパッキングする工場がある（パッキングしているMSG自体はタイ産）ことが普及の一要因であることは否定しないのだが。

カンボジアの料理を食べていて気づくことは、塩分控えめの料理が多いことである。暑い国なので、塩分補給は重要であろうと考えるが、カンボジア人にとっては、ケンタッキーフライドチキンなどは、「Salty」だそうである。カンボジアの朝食の定番である、「クイティオ」も、当地で食べる「フォー」も同様であるが、総じて塩分は少ない。その分、どちらも強烈なMSG味であるので、味が薄いと感ずることはない。カンボジア料理で塩辛いものと言えば、魚を塩漬けにして発酵させた「プロホック」という調味料くらいしか筆者は思いつかない。なお、このプロホックを使用した卵焼き、「ポンティアアーン トライプロマー」はとても美味である。

8. 終わりに

以上、筆者のカンボジアでの生活、カンボジアの現状について記してみた。冒頭に記したとおり、日本人のカンボジアのイメージは少々アップデートが必要であろうと考える。一度でもプノンベンに降り立てば、そのイメージは簡単に一新されるであろう。筆者の駄文を読んでカンボジア旅行を計画する奇特な人間がいるとは思えないが、是非当地を訪れて、経済発展まっただ中の新しいカンボジアを体験していただきたい。



写真5. アンコールワットの第三回廊